

「ひとり」の持つ可能性

客員教授 齊藤 とも子

Possibility of one person

Tomoko SAITO

■はじめに

現在、私は56歳で、女優業の他に、高齢者のデイサービスセンターで、非常勤の介護士として9年間働いています。今日は「ひとりの持つ可能性」ということで、お話させていただきたいと思うのですが、これまで生きてきて思うのは、本当に辛かったり、苦しかったりしたとき、必ず誰かに助けられてきたということです。誰かひとりの、ちょっとした一言だったり、誰かが、傍にいてくれたから乗り越えられたり、そうやって、なんとかここまでこられました。そして、辛かった時の体験が、その後の人生を支えてくれているのです。あのとき、あの人がいてくれなかったら、今の私はなかった。そう思うことがよくあります。みなさんも、その、かけがえのない「たったひとり」なんだということを感じていただきたくて、私のこれまでの体験をもとに、お話させていただきます。

■わたしの生き立ち

私は1961年、高度経済成長の真っただ中に、神戸市須磨区の回生病院で生まれました。父が通信病院に勤めていたので、両親と、ひとつ違いの姉と、板宿の郵政宿舎に住んでおりました。で、姉が3歳のとき、4階のベランダから落ちて亡くなりました。ベランダの柵に、お風呂の「すのこ」が立てかけて干してあって、その上に乗って、知っているおばさんが下を通りかかったから、「おばちゃん」って呼んで、そのまま…。母は私にカレーライスを食べさせながら、ご近所の方の相談を受けていたらしいのですが、「ドスン」と、鈍い、とても嫌な音が聞こえたそうです。

それ以来、母は自分を責め続けて、父は母が自殺してしまうのじゃないかと、それが一番気がかりだったと言っていました。でも、まだ2歳の私がいましてし、なんとか切り抜けて生きて、3年後には妹も生まれました。私が小学4年生のとき、その母ががんになりました。夏休みに家族で淡路島に旅行に行って、釣り船で魚を釣って、それをさばいて食べたりして、本当に楽しかったのですが、帰ってきてすぐのことでした。血便が出て、どうも様子が変わると自分でがんセンターに行って検査を受けるんです。S字結腸がんだったのですが、母は自分で医師から聞き出します。「もしがんなら、残された時間に、子どもたちにちゃんと伝えておきたいことがあるから」と。今から40年以上前のことで、がん=死のイメージがあって、告知はほとんど行われていない時でした。私の記憶では、母からの電話で、検査結果を知りました。でも、あまりのことに受けとめられなくて、ぼんやり、いつものように友達と一緒に遊びに行くんです。一番の仲よしのクミちゃん。「チトセ」という、なんでも屋さんのような小さなスーパーがあって、その前の空き地に。そのときの情景を今でもよく覚えています。友達に「なんかね、お母さん、がんやねん…」と言うと、そのクミちゃんが急に泣き出したんです。私は最初泣いてなかったのに、泣いているクミちゃんを見て、つられて泣きました。それまでは心が凍りついて固まっていたんだと思うんです。その痛みを自

分のことのように感じて泣いてくれたクミちゃんの心が、私の心を溶かしてくれたんだと思います。そういう友達がいてくれたことで、ほんとうに助けられました。

母はすぐ手術をしたのですが、39歳という若さで、すでに肝臓とリンパ腺にも多数転移していました。余命3カ月とのことでしたが、さすがにこのことは、父は母に言えなかったそうです。父が医者でもあるので、早めに退院して自宅での療養となりました。父は東洋医学的な療法を多数取り入れて、懸命に看病していました。その甲斐があって、3カ月どころか2年近くも生き延びました。当時は、モルヒネのような痛み止めはあまり使われていなくて、父も使うことに抵抗があったようなので、母の痛み、苦しきは壮絶だったそうです。母はいつも床に伏している状態でしたが、私たち子どもの前では、努めて明るくしてくれていました。そしてそんな母を支えているのが亡くなった姉・陽子の存在でした。母はいつも、私たちを枕元に呼んで「お母さんはね、死んだら、この痛いのも、苦しいのもなくて、陽子ちゃんに会えるから、死ぬのは少しも怖くないのよ。ただね、あなたたちのことだけが心配。あなたたちが悲しむことが辛い。だからね、その時は、お母さんは楽になれたんだなって思って、どうか悲しまないで。お父さんのいうことをよく聞いて、仲良く、明るく、元気に生きて行ってね、それだけお願いね」と言いました。最初のうちは「お母さんそんなこと言わんとって、死なんとって…」と言うんですが、繰り返しているうちに、だんだん心の準備ができていたように思います。そして、小学6年生の卒業式の前に、母は静かに息をひきとりました。

それから先、実は私は社会福祉に、すごくお世話になっていたと思うんです。でも、いわゆる制度としての社会福祉ではないんです。中学校に進学し、お弁当を持っていかなくてはならなかったんですが、同じクラスの友達のおかあさんたちが、交代でお弁当を作ってくれたことがありました。それ以外にも、クミちゃんのおかあさんが夕食を食べさせてくれたり、その他にもいっぱい周囲の人たちに助けられました。つらかったとき、誰か一人が手を差し伸べてくれたことによって、今まで生きてこられたっていうことが、思い起こせばたくさんあります。誰かに支えられて、やっとここまでこれたんです。

■女優をめざす

母が亡くなった頃に、私たちと同じような設定のテレビドラマを観ました。

おかあさんが「自分ががんだ」って判り、亡くなるんです。そして、残された家族が力を合わせて生きていくっていうストーリーだったんです。そのドラマをみながら「お母さんが話していたのはこういうことなんだな」と思いました。それで、私たちも、テレビのドラマのように生きたいと思いました。そのテレビドラマに、励まされたんです。ドラマと実際って、全然違うっていうのは、大人になれば当たり前のことなんです。まだその頃って、現実とテレビの中の架空のストーリーが混ざり合っちゃって、すごく身近に感じられました。こんなふうには、人が落ち込んでいるときに、少しでも元気にできる、人の心を変えられる、前向きにさせる、女優さんってすごい仕事だなと思いました。

もともと母は、とても元気で、風邪もひいたことがないような人だったのが、私の記憶の中で、最初にかかったのが、死につながるような「がん」という病だったんです。だから、「人間っていつ死んじゃうか分からないんだ」、「どうせ死ぬんだったらほんとに自分のやりたいことをやりたい」と、思うようになった気がします。

それで、当時流行の月刊誌「平凡」、「明星」という、今でいうアイドル雑誌ですが、

「あなたもタレントになれる」というタレント養成所の募集の記事に内緒で応募して、養成所に入ったのが、女優になったきっかけでした。

たまたま、ほんとに運がよくて、そこに受かって父親にも頼んで東京に転勤してもらって、16歳ぐら

いから、テレビや映画にも出るようになるんですね。すごく恵まれて忙しくなったにもかかわらず、そのうちに「ほんとに自分はこれでよかったのか」と思うようになりました。自分とは違う、「イメージだけが独り歩きしてしまっている」という不安感が、いつもありました。女優になって、いろいろお仕事を頂いたんですけど、結局26歳の時に28歳も年上の芦屋小雁さんという、お笑い芸人さんと結婚しました。父親と変わらないような年の人です。

■学ぶきっかけ

私は、結婚前は東京で女優の活動していたんですけども、結婚してからは、小雁さんが大阪の江坂に住んでいたのので、関西に戻ってきました。その後、神戸市北区の惣山町に引っ越して2人の子どもにも恵まれました。で、1995年33歳のとき、阪神大震災に遭ったんです。すごく揺れたんですけど、家が倒れるとか、それほどのひどい被害はありませんでした。

ただ、ちょうどその直後に、タイの山岳民族の人たちを訪ねる、あとはスラムの子どもたちを訪ねるっていうドキュメンタリーの仕事が決まっていたんです。神戸は大変な状況だったんですけど、「こんな時こそ、そこに行くことによって、学べるなにかがあるのではないか」と思って、行かさせていただきました。約40日にわたるタイでの出会いは、大きな転機となりました。

ミャンマーとの国境近くに、中野徳積さんという日本人女性が作った「リス寮」があって、そこに泊めていただいたんです。周辺には、いくつもの山岳民族の村があるのですが、学校がなかったのです。中野さんは、親御さんに頼まれて、子どもたちを預かって、共同生活をしながら、バスで学校に通えるようにしていました。子どもたちは朝暗いうちから起きて、体操して、家畜の世話をして、薪で御飯を炊きます。水道が通っていないので、井戸水や川の水を汲み、刺繍などの手仕事をして収入にもつなげます。畑を耕すのも、薪拾いも、すべて自分たちでします。夜には、自家発電で電気のつく部屋に集まって、みんなで勉強していました。「大きくなったら何になりたいの」って聞いたら、自分の村に戻って「学校の先生になりたい」とか、「看護婦さんになりたい」とか、そういう夢を語る子どもたちがいました。一心に勉強する子どもたちを見ているうちに、勉強というのは、本来こういうものなんだと教えられました。

私は中学3年の時から芸能界に入ったんですが、母がいなかったこともあって、ご飯作っているとか、妹のお弁当を作っているみたいなことが、すごく美談のように取り上げられて、優等生のイメージがついてしまっていました。学園ドラマに出ていても、いつも優等生の役が多かったです。でも、私は優等生って言われるのがすごく嫌で、それだけの理由で、高校2年生の時に中退しました。女優になるのに、なんで勉強しなければならないの、別に大学に行く必要もないしと思ってあっさり辞めたのです。そして女優として活動を続けていたのですが、やっているうちに、これでほんとはよかったのかという疑問が常にありました。

結婚して、しばらく女優業を休もうと思っていたときに、仕事でタイに行き、そこで子どもたちに出会って、とても自分が恥ずかしくなりました。自分が生きているこの社会で、どれだけ誰かのために役に立てるか、自分がこの社会でどう生きていくのか、それにつながるのが、本当の勉強だということを、タイの子どもたちから教えられたのです。

帰国して、女優という仕事にも自信がなかったし、辞めて、もう一回勉強して、自分に何ができるか見つけ直そうと思いました。そのときに浮かんだのが、母が亡くなった時に、私を助けてくれた友達のおばちゃん（お母さん）、仕事の巡業先で会ったおじいちゃん、おばあちゃんの顔だったのです。その人たちに、いつも助けていただいたのに、ちゃんとしたお礼の言葉も言えず、ここまで来てしまいました。でも、これから出会う、例えば高齢者の方たちに、自分が少しでもこの国の制度のことを勉強して、何か少

しでも力になり恩返しができたらと思いました。好きという気持ちだけでは、気持ちが空回りして、その人のためになることというより、自分の気持ちの押しつけだけになるかもしれませんが、勉強すれば、具体的にその方のために、役立てることができるかもしれない、と思いました。それを突き詰めていくと、社会福祉士、ソーシャルワーカーという仕事になり、人々が困ったときに、こんな支援がありますよと情報提供して、その方に自分で決めていただく、そういうアドバイスができる仕事がいいと思いました。それが社会福祉を目指すきっかけだったのです。とはいえ、高校中退ですから、まずは大学入学資格検定（現在の高校卒業程度認定）という制度があるので、その受験勉強をして、その後、3年浪人して、東洋大学に入学しました。東洋大学には大友信勝先生がいらっしゃる、大友先生の書物を見て感銘を受け、この先生がいる学校で福祉を学びたいと思ったのです。

東洋大学に入学したとき、ある先生から、忘れられない言葉を頂きました。「ここの大学に来た皆さんの中には、この大学にしか入れなかったと思って来た人が多いと思います。でも、この4年間、この大学にしか来れなかったって思って過ごすのと、この大学でこそ学べることを学ぼうと思って意欲的に学ぶのでは、雲泥の差があります。そのことを、心に留めてください」。そして「私は、社会福祉という言葉がこの世の中からなくなるときが、ほんとの社会福祉ができた世の中だと思います」っておっしゃったんです。この言葉が、ずっと心に残っています。私自身、福祉には、施しという意味を勝手に自分の中で考えてしまっていて、慈善事業的な、いいことやっているような、そんなイメージが、なんとなく嫌だなと思っていたのですが、その先生の話聞いて、そうだ、本来はそういうあたりまえのことなんだと思い、ちゃんと勉強したいと、改めて思いました。そしたら、ほんとに勉強したいこともはっきり決まってきたので、とても楽しかったです。

まず、大学のシステムもわかってなくて、自分で授業を選べるのが夢のようでした。自由に聴講できること、学割が使えること、図書館の本は借りたい放題、全てがほんとに夢のようでした。私より若い先生もいらっしゃる、戸惑われたと思いますが、先生方に、どんどんいろんなことを聞きました。大学というのは、こちら側がやる気さえ示せば、先生方が自分の利害関係抜きで、いくらでも情報を与えてくださるところだと思います。こんなことは、社会に出たらありませんから、何の遠慮もなく、どんどん先生を捕まえて話しに行くことを、お勧めします。そこから学べることはたくさんありますし、一つのことが気になって調べたら、次のことを知りたいというふうに出てくるのが勉強だと思います。そういう感じで辿っていくと、いろんなことが見えてきて、いつか、それがつながっていく。

今お話ししても、皆さんには何のことか分からないかもしれませんが、長く生きてると必ず、わかります。あのときに会ったあの人の言葉が、こんなふうにつながるなんて、とか、あのときのことがこんなふうにつながってくるなんて、と、驚くようなことが出てくるのです。自分が何を見ていきたいか、何を大事にしていきたいかという、自分の思いさえ決まれば、勝手にそのアンテナに入ってくるものです。そこから一歩踏み出すだけで、次々と世界が広がります。ぜひ、せっかく大学に来られているので、どんどん先生を捕まえて、がんがん皆さん聞いていただけたらと思います。

私は、大学で学び始め、女優の仕事を辞めようと思いました。でもそういうときに限って、断れない仕事があるものです。舞台上、『父と暮せば』という被爆者の話を演じました。それがご縁で広島に被爆者の方と出会いました。原爆に対して暗いイメージしかもっていませんでしたが、実際に私がお会いした被爆者の方たちは、悲惨な目に遭いながらも、一生懸命前を見て生きてこられた方たちでした。つらい思いを抱えながら、それを乗り越えて生きてこられた方たちに会い、私自身、とても励まされ、卒業論文も、その方たちの生活史を聞き取るものを書かせていただきました。

それで、女優業をしながら社会福祉の勉強をしていましたが、社会福祉士の資格もいただいたので、デ

イサービスセンターという高齢者の社会福祉施設で仕事をしています。9年になります。介護福祉士の資格もとったので、現在は、介護士として非常勤で務めながら、女優の仕事もさせていただいています。また、こんなふうに、大学でお話をさせていただくということも続けています。いろんな出会いによって、導かれたように思います。

■聞いて欲しい父の話

今日、皆さんに聞いていただきたいことが、もう一つあります。私の父の手記です。第二次世界大戦のとき、日本は中国の東北部に「満州国」という国を作り、侵略していました。父は、そこで生まれ育ちました。これが、手記の1ページ目の地図のコピーです。日本海って書いてありますね。ここは北朝鮮で、これは朝鮮半島です。ここが38度線で、そこから南が今は韓国、北は北朝鮮です。祖父は、南満州鉄道の満鉄病院に勤めていました。そのために、父は、この吉林で生まれました。地図のこの辺です。その後、満鉄病院が今の北朝鮮側の羅津にもでき、祖父は羅津の満鉄病院の配属となり家族で移ります。

そして間もなく終戦を迎えました、昭和20年です。父は、それから地図の道を辿り、9カ月かかって逃げて帰ってきたのです。その間、生死を分けるような出会いがいくつもありました。その出会いが16歳の父にとって強烈で、日本に無事着いてから、1、2週間で、手記を書き上げたのです。避難中は、小さなメモ帳に鉛筆で書き、ポケットに隠し持っていました。それを見て思い出しながらノートにまとめていったのです。その中で、特に父が自分の心に残った一部分を、その後勤めた病院の機関誌に載せました。そこを皆さんに聞いていただきたいのです。いつか、本にしたいという思いを抱えながら、父は2年半前に亡くなりました。

皆さん、北朝鮮にどんなイメージをもっていますか。最近の報道から不安に思う人がいることと思います。

まず、最初の前書きのところを読みます。

〈僕の一家は10年間ほど、満州の吉林という町に住んでいました。父が吉林の満鉄病院に勤務していたからです。ところが、昭和19年5月、父が羅津の満鉄病院へ転勤することになって、僕の一家は、この北朝鮮の羅津に移転してきました。僕は中学3年生でした。この羅津で、1年有余の歳月が流れ去った頃のある日、詳しくは昭和20年8月10日。その日から思いがけなくも、僕の境遇は一変しました。まったく予想もしていなかった生活が始まったのでした。〉

ここで少し説明しておきます。日本人は満州で、もともとその地に住んでいた人たちにひどいことをした経緯があります。侵略し、日本語を強制したり、学校でも、中国人や朝鮮人の生徒がいると、差別をしていたのです。ですから、敗戦で自分たちが逃げるとなると、もう何をされてもおかしくない状況です。今までひどい目に遭わせていた人たちが、負けとなって逃げるのですから。朝鮮の人たちに仕返しされてもあたり前という状況の中を逃げなければならなかったのです。

では、「ある体験」という父の手記を、聞いてください。

◆『ある体験』

第二次世界大戦も敗色濃くなっていた頃、私は、北朝鮮のソ連領に近い羅津という港町で、中学4年生だった。米ソ両国の飛行機でめっちゃめっちゃにやられた羅津の港は、爆発音のとどろきと断末魔の黒煙に覆われていた。こんなとき、昭和20年8月10日朝、母が止めるのも聞かず、中学校へ登校したのが運の尽

きだった。学校に行っている間に、町にはソ連軍が今日の午後2時ごろに上陸してくるから市民は逃げろという緊急通達がでた。

ところが、町からはるか離れた所に孤立し建っていて、交通機関もまったくなく、電話線も切れていた中学校にはこの通達が届かなかった。そして、何時間かたってから学校がこのことを知ったときには、時既に遅く、ソ連軍上陸直前の時刻であり、家の者は、近所一団となって逃げ去った後であった。結局、その日登校してきていた少数の中学生は家に帰れず、先生たちと一緒に山の奥へと逃げることになった。それからは、来る日も来る日も、ソ連軍から逃れたい一心で、奥深い山の中を一日中行軍して夜、野宿といった日が続き、みんな疲れ果てた頃、敗戦となった。羅津中学は山の中で解散ということになり、先生とも別れ、生徒もばらばらになった。(斉藤説明：敗戦になったので、もう学校として逃げるのではなく、皆さんそれぞれ勝手に逃げてくださいということになったのです)。

この頃には、われわれの他にも、難を逃れて、われわれの前後を歩いている日本人の群れがあった。そこで、僕らも三々五々、何とはなしにその群れの中に合流して、咸興(カンコウ)へ、(地図を示しながら道筋を説明：山の中から浜辺に向かってたどったのです)咸興へと、相変わらず山の中ばかりを毎日歩き続けた。咸興には、避難民が集結しており、日本人世話会があり、極度に困っている者は助けてもらえるといううわさがあったからだ。後で分かったが、日本人世話会にはそんな力はなかった。この頃、中学生の内田、小林、泊(トマリ)、僕の4人がいつの間にか、一つのグループをなしていた。とにかく、町の人々20人くらいと一軍になって、いろんな目に遭いながら、1カ月ほど山の中を歩き続けた。われわれ一行は、久しぶりに山を抜け出て、北朝鮮の東海岸の利原よりもずっと北のほうにあたる、とある小さな漁村にたどり着いた。(斉藤：たぶん、この漁村は、この海沿いのこの辺の所だと思います。)

われわれ中学生は、4人とも制服はぼろぼろに破れて、上着の裾は、名誉の軍旗のように、ふさふさになっていた。靴も破れて、いつの間にか無くなり、裸足で顔も汚れきっていた。

もう既に夜になっていたので、この日本人の一軍は、何軒かの漁師の家に分散して泊まらせてもらった。翌朝、近所の村人たちが集まってきて、僕ら中学生をじろじろ眺めた。やがて、ある者は、残っていた冷や飯を持ってきて、「食え」と勧めてくれ、また、ある者はジャガイモ、魚などを持ってきてくれた。空腹の極みであった僕らは、久しぶりのごちそうに、押し頂いて、すぐ、がつがつ食べ始めた。

■地獄で仏

取り巻いていた村人たちは、口々に朝鮮語で「かわいそうに。これが秋なら餅を食わしてやるんだが。親とはぐれた気の毒な少年たち」などと言っていた。女の人や老人たちは、涙ぐんでいた。それから、屈強な漁師の人たちが、われわれ日本人全員を集めて言うには、「これから先は、陸路を咸興まで歩いていくのは、非常に危険です。反日感情の強い町を幾つか通り抜けねばならないし、ソ連兵がたくさんいるし。ソ連兵は、人と会うとすぐ、『ヤポン、日本人か?』と聞き、日本人と分かると、ひどい目に遭わす。とても危険だ。それで、これまでの日本人の避難民は、ここまで来たらみんなここから船で、咸興のすぐそばの、西湖津港(セイコシンコー)に渡るコースを選んでる。あなたたちも、そうなさるのがいいですよ」と。しかし、この船の乗船料は、一人100円とのこと。(斉藤：当時の100円というのはすごい大金なのです。)僕ら4人の中学生以外の人たちは、それまで大事に持ってきた有り金をはいたり、また、無理して金をこしらえたりして、みな船に乗った。(斉藤：おそらく、単純計算して1円が1万円ぐらいだろうと思います。100円などという大金は、本当に子どもたちが持っているような額ではありません。)僕ら中学生が乗るには、400円要る訳だが、僕らにそんな大金があろうはずがない。4人だけ、こんな辺境に取り残されるのはたまらなく心細いが、どうしようもない。「仕方がない、歩いていこう」と、僕ら

4人は決心した。時刻は午前10時頃だ。不安を胸に4人は南へ向かって歩き始めた。天気と景色だけはいい。雲一つない青空。左に、絵に描いたような美しい松原と海が続いている。4人は、とにかく歩きに歩いた。昼休みにと休憩した松林の中で、怖い目に遭って、ほうほうの体で逃げるといったようなこともあったが、その他には、人ひとりにも会うことなく歩き続けていた。やがて夕日がまさに沈まんとする頃、とある村落が見えだした。僕らは、一番手前の朝鮮人の農家の入り口におずおずと立っていた。「今晚どうか泊めてください」と言うと、家の中から出てきた20歳ぐらいの青年が、僕らをしげしげと眺めていたが、「それはかわいそうだなあ、泊めてあげよう」と言った。僕らはほっと胸をなでおろした。途端に空腹をひどく感じた。「食べる」と炒った大豆を持ってきてくれた。僕らはいっせいに飛びついて食べた。夕食は、川魚などのおかずで御馳走してくれた。大喜びで食べた。食後の団らんの時、しみじみと僕らを眺めていた40歳ぐらいのこの家の主人が言うには、「お前らは、とうてい咸興までは行けないだろう…。しかし、朝鮮人の様なふりをして、ソ連兵が何を尋ねても、（こうして口の前で右手を小さく振って見せながら）、『分からない、ものが言えない』というふりをしろ。ものを言わなければ、日本人だということがばれないかもしれない。そうすれば、大丈夫かもしれない」と親切に教えてくれた。翌朝、出発の時、「食料にきなさい」とジャガイモや大豆をたくさんくれた。僕らは、本当にうれしく、心から何度も何度もお礼述べて、この家を出立した。

■敵か味方か—ソ連兵に会う

僕らは、また南へ南へと歩いて行った。割に幅の広い道路だが、車にも人にもほとんど会わなかった。かなり歩いた時、僕らは、ハッとした。後ろからソ連兵が一人、自転車に乗ってやってくるのではないか。どうしよう。もうすぐ背後に迫っている。逃げることなど、とてもできない。仕方ない。僕らは、「ウラー、ウラー（斉藤：万歳、万歳って言う意味なのです）」と両手をあげて叫んだ。助かりたい一心で、ソ連兵のご機嫌を取ったのだ。彼は、じろりとこちらを見て、すぐさま自転車から飛び降りて何か怒鳴った。

そして、すぐ僕らの荷物検査、服のポケット検査などをはじめた。胸がドキドキする。僕らが、武器など持っておらず、乞食同然で、いいものは何も持っていないことを知って、彼は、また自転車にまたがり過ぎ去って行った。皆、ホッと息をついた。それから、ちょっと歩いたところで、大きな山に差しかった。この山にも大きな軍用道路が通っている。

僕らは、山の中へと、この軍用道路を歩いて行った。すると、またソ連兵に会った。自転車から降りて何か拾い、しげしげと見ている。さっきのソ連兵らしい。何を拾ったのかとよく見ると、革の財布だ。「あー、僕らこそ財布を拾いたかったな」と、少々羨ましかった。彼は、そばを通り過ぎる僕らには何も言わなかった。僕らは、どんどん先へと歩き続けて行った。この道路は、山の中をかなりうねり曲って走っていた。しばらく行ったとき、後ろからトラックがこちらへ走ってくるのが見えた。なんと、ソ連兵をいっぱい乗せたトラックだ。また困ったことになった。トラックがすぐそばに来た。「ウラー、ウラー」と両手を上げて叫んだ。すると、乗っているソ連兵たちも手を上げて応えてくれた。ホッとした。すると、またトラックが来た。同様に万歳を唱え、無事通過。それから、また歩き出し、しばらくした時、後ろのほうから何か叫び声が聞こえた。はるか後ろの方からだ。何となく胸騒ぎを感じたが、何でもないだろうと言いつい聞かせ、歩みを止めなかった。「パーン」「パーン」。突然、激しい自動小銃の響き。皆、ギクッとしたり「停止命令だ」と直感した。僕らは立ち止まってふりかえった。

ソ連兵が1名、自転車に乗って全力疾走してくる。皆、さっと顔色が変わった。みるみる近づいてくる。ついに来た。やにわに飛び降りたソ連兵は、素早く自動小銃の筒先をこちらに向けた。「ヤポン？（日本人か）」鋭く叫んだ。

■モト、ハンガチサラムヨ 一 皆、同じ人間です

僕らは何も言わず、ただ、口の前で手を左右に振った。ソ連兵は続けざまに、「ヤポン、ヤポン」と怒鳴った。こちらは、また口の前で手を振った。すると、彼は、僕らの持ち物、服、ポケットの検査をした。検査が終わると、ソ連兵はまた「ヤポン?」「カリャンスキ? (朝鮮人か)」と前より大声で怒鳴った。僕らは、また口の前で手を振る。ソ連兵は、僕らの顔をじっとにらんだ。そして、いきなり、僕らの中の一人、小林君に銃口をぴたりと向け、「ヤポン、ヤポン」と、うなづくように断定した。「しまった! 取り返しをつかぬことになった」と思った瞬間、僕の意識は、そのまま止まった。青空、山、杉林が、ぐわーんと迫ってきて、その全景がくっきりと浮かんだ。その時だ、小林君が、僕らをひとわり指差しながら一生懸命に言った。「モト、ハンガチサラムヨ (皆、同じ人間です)」朝鮮語だ。ソ連兵は疑わしそうに僕らを見回まわした。そして「座れ!」と手真似で言った。僕らは、並んで土の上に正座した。

僕らが座ったのを見届けると、ソ連兵は、もと来た道のほうを指差して、何か言って自転車に乗って過ぎ去って行った。今、銃殺されるか、今、銃殺されるかと生きた心地もなかった。僕らは顔を見合わせた。助かった! 皆ホッと胸をなでおろした。しばらくそのまま座っていた。辺りには人影一つなく、誰も通らない。そのうちに、「このまま座っていなくてもいいだろう、立とう」ということになり、立ち上がった。

■日本人か、朝鮮人か

そして、ふと、もと来た道路のほうを見ると、なんと、またソ連の軍人がこちらへ来るではないか。今度は、一人乗りの馬車に乗ったソ連軍の将校だ。一難去ってまた一難。その馬車は、どんどん近づいてくる。まもなく僕らのそばに来た。ソ連の将校は僕らを見てすぐ、後ろからついてこいと手真似で命令した。僕らは、仕方なくその馬車の後ろについて歩いた。将校は時々振り返って、ひげの生えたものすごい顔でこちらを睨んだ。誰も、ものも言えず、ただただ引かれるように歩いた。

やがて、山を越し終わって平地に出た。右手の奥まった所に、一軒の朝鮮人の農家が見えた。するとその時、その家から30歳代くらいの男と女の人が出てきた。将校は馬車を止めた。女の方は、将校の傍へ歩み寄って、持っていた卵をうやうやしく捧げた。将校は受け取った。それから出てきていたその男のほうを向いて、僕らを指差しながら「ヤポンスキ? カリャンスキ?」と聞いた。僕らは一瞬息をつめた。朝鮮人から見れば、僕らが避難中の日本人であることは一目で分かる。その男は、僕らをじっと見た。………「カリャンスキ!」その男は

はっきりと言い切った。助かった。将校は即座に僕らに「行け」と合図した。僕らは、言いようのない程の安心と喜びに包まれながら、無言の中に、この朝鮮の男の人に、心から、深い深い感謝を込めた黙礼をして、静かにその場を離れていった。

避難民生活のほんの始まりのごく一部を書きましたが、この後の咸興、興南 (コウナン) …の長い避難民生活の間にも、何度も死にかけては、その都度、人の情に助けられました。こんなこともあって、国家、民族、主義、個人などの全ての壁を越えて、思いやりの心は人を本当に生かしていくんだなあ…としみじみ知らされました。

■38度線を越える

機関紙に寄せた手記は、ここまでです。そのように助けられて、父たちは、38度線を越えると、うんと逃げやすくなりました。38度線より北側が、非常に反日感情も強く、ソ連軍もいて危ない地域だったのです。ここから最終的に釜山に渡って、父は博多にたどり着いた訳です。

父の体験した手記の一部を読みましたが、意味はなんとなく分かってもらえたと思います。結局、今まで日本人たちがひどい目に遭わせていた朝鮮人の人が、ソ連軍に、父たちが捕まって聞かれたときに、「この子は朝鮮人だ」と、朝鮮人の農家の人が証明してくれたことで、父たちの命は助かったんです。私は、大人になってから、この話を聞きました。父からこれをもらって読んだ時に、その朝鮮の農家の人に、大変感謝しました。もし、このとき「この子は日本人だ」と言われていたら、恐らく父たちは捕まってどこかに入れられたか、あるいは、殺されていたかもしれない。更に、嘘をついたことが判ったら、この朝鮮人の夫婦も無事ではなかったと思います。ですから、自分たちをひどい目に遭わせていた日本人の子どもを、この朝鮮人の夫婦は、命を懸けて命を助けてくれた訳です。もっと後になって思ったのは、もしかしたら、ロシア人の将校も分かっていたのではないかと、最近は少し思ってきました。

これはもう、まったく私の推測です。でも、これが、もし、たくさんのロシア兵がいたら、無理だったかもしれませんが、この人は一人でした。ですから、このことを見なかったことにするというのを、もしかしたら、ロシアの将校さんも思ったのではないかと、この頃、私は考えます。

■日本、朝鮮そしてロシア

そうすると、私の知らない時代に、ある地域で、日本と朝鮮とロシアの三つの国の人たちが、すごい体験をしたというか、そういうことがあったのだなという気がするのです。もし、あのとき、父が殺されていたら、私は生まれていませんでした。もちろん、皆さんと会うこともなかった訳です。そんな風に、たった私一人が生まれてくるためには、こういうことがあって、やっと私がいるのです。皆さん、お一人お一人がそうだと思うんですね。もちろん皆さんのご両親は、それぞれ違う状況の中を生き抜いてこられているわけですが、ご先祖は戦争も経験し、色々なことを経験した中で、なんとか生き継いできた命があるからこそ、今皆さんがここにこうしていられるのです。

■人との出会いで運命は変わる。

例えば、その朝鮮人の農家の人が違う人であったら、全ての運命が変わっていくわけです。私一人がないことによって、あえて、そういう言い方をしますけども、私が出会ってきた一人ひとりの人も、全部その人の出会いが変わっていきます。たった一人と思いますが、その一人がいるかいないか、どう生きるかによって、計り知れない影響を及ぼすことがあるのだと思います。父自身も決して、できた人間ではありませんが、このことだけは忘れられないでいます。私たちにもその話をよくしてくれました。もともと父は体も弱く、友達と一緒に逃げるができなくなり、その途中、逃げ込んだ朝鮮人のおうちで働かせてもらって、稲刈りなどの手伝いをしながら、ご飯をしばらく食べさせてもらうことも繰り返しながら、9カ月かかってひとりで逃げて帰ってきます。だから、父が一番好きな食べ物がキムチなんです。日本のキムチはちょっと甘いついて言っていました。朝鮮で食べた地元のキムチはもっとも辛かったらしく、そういう本場の感じのキムチの味が大好きでした。父にとっての「ふるさと」というか、「原風景」というのは、満州の吉林と、北朝鮮の風景だったんだと思います。

私もその後、生きてきて、皆さんにさっき言ったように、女優という職業を目指してなりました。しかし、なかなかうまくいかないこととか、忙しくなればなつたで自分が求めていたのは本当にこれなのかが分からなくて、迷った時期がありました。でも、いつも、そんな時には、必ず誰かと出会い、助けられることがあって、生きてくることができたんです。

■映画『カンタ！ティモール』

戸田先生が作ってくださったビデオ（動画）の中で、映画『カンタ！ティモール』の紹介がありました。この映画は、是非みなさんに観ていただきたいドキュメンタリー映画です。

当時、22～23歳の広田奈津子さんという女性が、名古屋の大学を卒業後に、インディアンを訪ね歩く旅をします。そして、東ティモールの独立記念日に、現地で、ある青年が歌っていた歌に心を奪われます。その人の名前も、曲名も何にも分からないまま彼女は日本に帰国するんですが、その歌が心に残って、ずーっと耳を離れなかったそうです。そして、その歌の歌詞の意味をどうしても知りたくなくて、もう一度東ティモールに行くんですね。名前も、会えるかどうか分からないのに、同じ独立記念日に同じ場所に行けば、きっと彼が歌を歌っているだろうという低い確率を信じて、必死にお金をためて行くわけです。そうすると、その彼がいたんですね。彼はアレックスという名前で、奈津子さんと同い年でした。アレックスにその歌詞の意味を知りたいと言ったら、すぐには教えてくれなかった。

2002年に東ティモールはインドネシアから独立したんですが、それまでには、大変悲しい歴史がありました。インドネシア兵による襲撃と虐殺。それに対して、なんとか平和的な戦いで勝ち抜いて独立します。そのあとに、たまたま、奈津子さんはアレックスに出会った。彼は歌の意味を教えてくれず「じゃあ僕についてきなさい」と言って、いろんな村を案内してくれました。東ティモールは、テトゥン語なんですけど、もちろんそんな言葉、奈津子さんは話せません。スペイン語とか英語は話せますので、アレックスが多少そういう何かがあったのかと思うんですが、村と一緒にいきます。その片言の英語と、間を介してくれる人がいて、話を聞いていくうちに、東ティモールは、何年前にずっとインドネシアから攻められて、たくさんの人が殺されたり、女性はレイプをされたりと、ほんとに悲惨な歴史を聴くわけです。

そういう中を東ティモールの人たちは生き抜いてきているんですが、殺されたりしたことに対して、彼女が出会った人たちは、恨んだり、憎んだりしてないんですね。私も最初に映画を観た時に信じられませんでした。映画の中で言っている人たちの顔がうそじゃないんです。殺されたり、目の前で妹をレイプされたりとか、思い出するのはとても悲しいし、亡くなったことは、とてもつらいことだけれども、でも憎しみはないって言うんですよ。

■歌に込めた想い

彼らの考え方っていうのは、裁くのは神様の仕事だと。亡くなった魂のために祈ることが、自分たちにできることで、生と死は境界がないというか、死んだ人たちもずっと自分たちの周りにいて、自分たちを見てくれている発想なんですね。

そういう方たちと出会っていくうちに、彼女はこの人たちのことをなんとか日本のみんなに伝えたいって思うようになります。それで、また日本に帰って、廃棄になったテープを何百本ともらって、機材も友達に借りて重ね撮りをするわけです。そういう形で、一緒に行ってくれる仲間も探しながら撮影を続けました。

アレックスの歌は、実は、そのまま言葉にすると捕まったり、殺されるかもしれない内容だったのです。例えば、「大地はみんな知っている。だから、きょうだい達、その大地なる母を泣かせることはやめよう、全部自分たちのやることは見てる」という内容です。言ってみれば、もう戦争はやめようって、平和が一番大事だということを、その歌に託しています。だから、その歌の持つすごく深い意味に彼女は心を打たれたのです。また、この東ティモールという国で生きている子どもたちはとても明るくて、この映画はテーマがすごく重いにもかかわらず、子どもたちの歌声と笑顔にあふれているんです。奈津子さんたちが「歌ってください」と頼んでるわけじゃなくて、町の至る所で子どもたちが勝手に歌を歌っているんです。アレックス

クスは、歌が好きなのなので、いつも子どもたちを集めては、自分が作った歌を子どもたちと一緒に歌うということをずっとしている人です。

■悲しい事実と奈津子さんのパワー

実はこの映画を観るまで、東ティモールがどこにあるかも、内戦があったことも、恥ずかしながら知らなかったんです。でも、この映画で、私たちが知らない間に、私たちの税金が、インドネシア軍の武器を買うためのお金に回され、支援を日本がしていたという悲しい事実がわかりました。だから、奈津子さんは、敵にあたるような自分たちが訪ねて行って、ほんとに話してもらえるんだろうかと、怖くなるんですけど、向こうの人たち、ちゃんと受け入れてくれるんです。それどころか、「日本は広島、長崎がある国だよ。自分たちと同じだよ」と、親近感を持って、彼女と話してくれるんですね。でも、それは広田奈津子さんの持つ人柄とか、聴こうとする姿勢に、ティモールの人たちが心を打たれたからこそ、自分たちのつらい話をしてくださったと思います。彼女はこの取材の後、約10年かけて映画を完成させます。彼女は映画学科の生徒でもなんでもなくて、映画なんか作ったこともないのに、自分で説明書を見ながら編集をするんですが、でき上がった映画がそういうレベルじゃないんです。プロのドキュメンタリー作っている知人たちが観て、「信じられない、彼女は天才だ」と言いました。テンポも良いし、編集も実にうまくて、粹で、大事なことが伝わってくるんです。ナレーションも彼女自身がしているので、ほんとに、皆さんと同じぐらいの女性が作ったっていうことで、ぜひ観ていただけたらと思います。

■アレックスの伝言

実はこの映画のきっかけにもなったアレックスが、この11月9日に急に心臓発作で亡くなったんです。奥さまも同じように平和活動をしていた方で、お子さんが5人もいます。すぐ奈津子さんは、何かできないか考えました。何よりも大事なのは、アレックスが伝えなかった平和の思いを、残された私たち、アレックスに出会った私たちが、忘れないでずっと引き継いでいくことなんじゃないかと。あとは、残されたほんとに小さいお子さんたち5人、奥さま、この人たちが生きていくことを、少しでも何か援助することができたらっていうことで、急ぎょ、名古屋と東京とで、追悼上映会を無料で開いて、そこでカンパを集めることにしました。で、12月の半ばには奥さまの所に会いにいて、直接届けるということで、既に動き始めています。

自主上映で今もずっと全国いろんな所を回っていますので、必ず近辺で上映会が開かれることがあると思いますので、ぜひとも観ていただきたい。もし広田奈津子さんのお話がある回であれば最高です。

お伝えしたかったのは、そのアレックスからの伝言です。映画を撮り始めたのが、2002年で、2011年震災のあった直前ぐらいに完成しました。最初に東ティモールで上映会をしたときに、奈津子さんは、アレックスから、日本の人たちにとメッセージを預かるんですね。ティモールの人たちは、日本の震災のことを、原発の事故を、放射能のこともすごく心配してくださっていたんですね。それでメッセージをくれたんですが、その言葉が素晴らしかったのでお伝えします。

「もしあなたの仲間が10人しかいなくて、対するものが大きく巨大で1000人にも見えても、あなたのやっていることがいのちに沿ったこと、いのちが喜ぶことであれば、なくなった人達がついていてくれるから、どうか恐れなくて続けてください。

仲間が少なくて不安になったら、僕たちのことを思い出してほしい。僕たちはとても小さかった。あの巨大な軍を撤退させることは、奇跡だと笑われた戦いでした。でも最後には軍は撤退した。それは現実起きたことだから、どうか信じてほしい。」

例えば、東ティモールの人たちが、自分たちの土地を守ろうとしているときに、ゲリラみたいな感じでインドネシアの兵隊が攻めてきますよね。捕虜として、敵のインドネシア兵を捕まえたとします。でも、彼らは絶対、そのインドネシア兵を殺さなかったんですね。逆に、彼らに話をして、あなたたちがやっているのは、すごく無謀な戦いなんだよっていうことを話して聞かせて、インドネシア兵を解放していったんです。だから、インドネシアの兵隊たちも、強制的に軍に派遣されていたわけですけど、自分たちのやっていたことが間違っていたってということで、帰ってからは、その思いを入れ替える人たちもいたと聞いています。

このように相手を傷つけることではなく、言葉で説得することとか、違う形で戦い抜いて、独立を果たしたんです。だから、僕たちのその戦いは絶対無理だと言われた戦いでした。でも、実際に自分たちは、それで平和を勝ち取りました。だから、「もしも、どうしても駄目だと思ったときは、自分たちのことを思い出してください」という応援メッセージなんですね。

もちろんこんなに早く亡くなるとは、彼は思ってもいなかったと思うんですが、私もこの映画に出会った一人として、アレックスの言葉を奈津子さんという日本の女性を通して聞かせていただいた一人として、これから先も少しでも、そのアレックスの命がいろんな人に受け継がれるように、この思いを伝えていきたいと思います。

■これからどう生きていくか

これから生きていく世の中は、今の日本を見ると心配になることが、正直あります。でも、そういうときこそ、自分たちがどこに向かっていくのか、何が一番大事なのかっていうことを、しっかり一人一人が持って、自分で決めて歩いて行かなければいけないと思います。マスコミの情報も鵜呑みに信じるのではなく、本当にそうなのかと、いろんな角度から見て、考えてください。どこか気になる場所があったら、危険がなく行けるのであれば、是非足を運んでいただきたいと思います。直接自分が行って、肌で感じることは、何よりも自分の心に残るからです。

きっとこれからも皆さま、多くの大事な一人に出会うでしょうし、皆さん自身が、誰かにとって、必ず、かけがえのない一人であると思います。どうか皆さん、頑張って、ご自分を信じて、ご自分の感性を信じて生きていていただきたいと思います。本日は、どうもありがとうございました。